史料室だより No.76 東洋英和女学院史料室委員会
発　行　2011年4月25日

特集：勤労動員（2）
昭和20年8月16日からの5年間

岩原　さかえ

咲き誇る鉄道よもぎの街

昭和20年5月26日の大空襲で六本木は瓦礫街と化していたが、無条件降伏した8月15日の頃は、そこかしこに鉄道よもぎと称する雑草が背高く伸びて白い花をつけ蝉の声だけがやかましかった。その頃宮城(きゅうじょう)(注1)前や代々木練兵場では軍人達が切腹したとか、厚木の飛行場からは降伏に反対した将校達が海上に向って自爆していったとか血生臭い話が伝わってきたが、英和の前は誰も通らない無気味な静かさだった。

私は当時24才。何故その日そこにいたのか忘れてしまったが、師範科主任の功刀(くぬぎ)嘉子先生の指図のもとに、光明照子先生と3人でひなた水のドラム罐のお風呂に入ったことだけが70余年経った今でも強烈な印象となって残っている。戦時中は虱(しらみ)による伝染病の口内炎でひどい目にあった。小豆大の体の周囲に小さな足が沢山ついている吸血虫が、その外容から“千手観音”の異名を持つ“シラミ”と知った時の恥辱、日本人もここ迄落ちぶれたかと身震いがした。昭和20年2月末、疎開先から帰ってきた小学生達が持ち込んだとも聞くが、“里いも”のごった煮の如き銭湯にも、ぎゅうづめの電車のすぐ目の前でも見つけることができ、その実在を知って以来人々はシラミ退治に熱中したので騒ぎも下火になったが、終戦直後の入浴は最高のぜいたくであった。私達三人は、空襲のない平和な白昼人通りのない道端で、たくましい鉄道よもぎを背景に平和を心から満喫できた。功刀先生は私より15才年長の丙午(ひのえうま)生まれで、個性的な有能な策略家でもあり、彼女より5才年下の優等生タイプの光明先生でもこの上機嫌の先輩にさからうことは出来なかった。私はその奇抜な大胆な計画に感嘆しながら、半分は誰かにどこかで見られていて、長野先生に言いつけられたりはしないかとビクビクした。

入浴事件に次ぐ思い出は、みじめな空腹問題である。この稿を起すに当り、英和『百年史』を丁寧に読んでみた。そして“食糧事情が悪く”というとりすました表現にがっかりし、具体的に書き残す必要を痛感した。当時国からの配給は殆どなく不定期的なアメリカ軍の放出物資に頼る他はなかった。それらは油を絞ったあとの栄養もないフカフカした赤茶けた豆のカスや、とうもろこしの黄色い粉等であり、それを食いつぶした庶民の台所には食べるものが全くない。国民はリュックや縞柄の大風呂敷を持って、さつまいもの買い出しに行かざるを得ず、省線(注2)も都電も大混雑、私は英和の農場があった花小金井周辺の農家の土間で土下座をしてさつまいもを分けて貰い、帰途片方の下駄を混雑の中で失い、片方はハダシで家に帰ったことがあった。

授業が再開しても、昼食時にお米の御飯を持ってくる人は僅かで、大ていの人はさつまいもか粉食と称する自家製のふかしパンであり、生徒の中には昼食時屋上ですごす欠食児童も数人いた。そこで長野先生は欠食の生徒や教職員のために大鍋に豚骨を何本も入れた雑炊を作り給食させた。彼の本職は物理であったが、今や英和の

画：木下栄子氏

最高責任者となり、人々を飢えから救うためには抜群の才能があり、豚骨や野菜は花小金井の周辺から、お米は借家人の軍からの隠匿物資を大事に賄っていたらしい。当時あの誇り高き帝国ホテルの売る雑炊を行列して食べた人もいた。

又長野先生は教職員のために校舎内の地下室に五右衛門風呂を炊いてくれた。鉄類は戦争中供出させられ弾丸になっている筈なのに、どこから探してきたのか誰も詮索する気は毛頭なく順番に五右衛門風呂を楽しんだ。盗賊石川五右衛門が秀吉のために釜ゆでの刑をうけたことからこの名がある。やけどをしないように、鉄釜に浮かぶ“寶(ず)の子(こ)”の上に乗って体を沈める古風な風呂は、洋風な英和とは対照的ながら、平和の訪れをしみじみ感じさせるものがあった。

米軍のトラックに乗る

国語の教師であった私は生徒の作文から多くの事を知った。「私の家ではお父さんがいるので大助かりです。戦災でお父さんがいなかったら私達はパンパンになっていたでしょう。」パンパンとは進駐軍相手の売春婦の通称である。戦後三、四年の間、有楽町や上野の辺には一見してそれと判る街娼が並んでいたが、中には和服の上品な人妻がハンドバックを抱えて立っている姿もあった。後年評判になる松本清張のあの小説(注３)は当時どこにでもあった可哀そうな女達から取材していた。

昭和20年の秋、進駐した米軍を不純な非行に走らせないために、キリスト教の団体を通して健全な国際交流をはかろうではないかという“おたっし”がどこからか出て、英和の正面玄関に米軍の大きなトラックが横づけになり、英語に堪能な最長老の吉本てう先生（当時50才位）をはじめとする英語の教師達を先頭に、なにがしかの餌にありつけるかも知れないというあさましい好奇心だけの末端の私迄全員がトラックによじ登り赤坂辺の接収された邸に行ったことが一度だけあった。そこは既に別のミッションスクールからの先生達もいて、優雅な音楽の中でアメリカ兵とペラペラ喋ったりダンスをしていた。英語もダンスもできない私は壁に張りついて、珍しい紙コップでコーヒーを飲んだり、ビスケットよりおいしいクッキースを齧(かじ)ったりしていた。東京に焼夷弾を雨あられと降らせ各所に死人の山を作った鬼畜敵兵共はこの時、ハリウッド俳優のロバート・テイラーやゲイリー・クーパーの如くに見えた。この人々がパンパンを買わないように、私達はトラックで狩り出されたのか、何と愚かしい人間の世界だろうと私は虚無的になった。

宗教活動

戦後間もなくアメリカから日本を訪れたビリー・グラアムの大衆伝道は希望を失った日本人に一時的にでも爆発的な人気を博した。霊南坂教会の平山照次牧師が英和の宗教週間の講師として招かれ、ビリー・グラアム的な猛烈な伝道説教のあと、一同に起立して讃美歌を歌わせ、キリスト教を受け入れようと決心した者は着席して祈るようにと言われた時、真先に腰をおろした私ではあったが、こんな方法は困ったなとひそかに思った。そして最後迄頑固に突立って着席しない数人の中に、日頃親しくしている先生方や成績優秀な教え子を見出した時に私の不安は的中した。

次に特筆すべき講師は駒込教会（西片町教会）牧師の鈴木正久先生である。

彼はカール・バルトやエミール・ブルンナーの影響をうけ、人間の内にひそむ罪について論理的に分析し、ほろびに到る崖っぷちに立たなければ救いへの道はないと説き、聴衆に居眠りの隙を与えなかった。英和の人々は朧気(おぼろげ)ながら20世紀の神学者カール・バルトの危機神学をうかがい知り、鈴木牧師の大好きなドストエフスキーの『罪と罰』も初めて知ることが可能となった。鈴木先生は雄弁であり、人をひきつける有能な牧師であったが、常識を逸脱した欠点もあった。正規の授業をサボって個人的に先生と対談したがる生徒を作り、そのことは教職員会議の問題となった。“花園の如きミッションスクールの職員室は必ずしも天国ではない”と、先生は英和の外で辛辣な批判をくり返した。

生徒の家の多くは佛壇や神棚があり、日本古来の伝統やしきたりが長い年月をかけて浸み込んでいるからキリスト教を理解させることは困難である。熱心なクリスチャンの教師の執拗な親切すぎるすすめが却って仇となり、優秀な生徒が中退してしまった例もある。しかし若い頃英和で蒔かれた種が何十年も経って人生の危機に面した時に突如として芽生える例は多い。

戦後の困窮のドン底で、一度も遅配することなく、先生方に給料を支払った長野先生の苦労

は並大ていではない。私は給料は、打ち出の小槌の如く、誰かが振りさえすれば出るように考えていたことは長野先生に申し訳なく思う。しかしその事が先生をワンマンに成長させていったことも事実である。

あれから半世紀以上も経ち、当時を知る人は皆死んでしまい、鉄道よもぎが一面に咲いていた路上のあちこちに摩天楼が聳えている。24才だった私は90才となり、もう誰も知らないあの混沌としてざわついていた戦後５年間を、遺言として書いている。

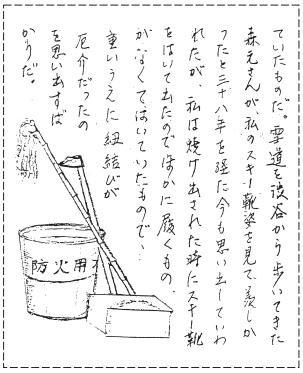
（元国語科教諭　1942年～1951年在職
旧姓　比屋根）

［注１：宮城－現在の皇居　注２：省線－現在のＪＲ線　注３：小説名－『ゼロの焦点』］

「戦時下の女学校生活」第２部

下 山 田　典 子

（75号「戦時下の女学校生活」第１部のつづき）



下山田さんの直筆　絵入り手記（コピー）

校内建物の出入口・廊下などあちこちに水槽・砂袋・火叩きが用意されていたが、用具類すべて不足勝ち、軍用でなければ何もない時代だったから、学校中で常備する多数の槽は大変貴重で礼拝の時、特にその旨のお話があった。

空襲警報―待機

空襲のサイレンが鳴ると、生徒達は直ちに避難、待機する事になっていた。クロークルーム・地歴・生物・化学室及準備室前の廊下あたりに防空頭巾をかぶり救急袋・非常袋を肩にかけうずくまって待つ。時には半日近くもそこにいた覚えがある。教室のドアの上部にはめこまれているガラスにはベニヤ板のおおいが張られていたのでうす暗い廊下の冷たい石の床に坐って警報が解除されるのを待ちながらまわりの人達と話をしたり、時には非常袋の中の非常食（炒り米・乾パン・炒り豆など）をつまみ食いしたりした。昨今のように携帯用のラジオがあるわけではないから、玄関脇の事務所から伝令係の先生か生徒がその都度状況を伝えに走って来る。「今のうちに近い人は帰宅するように」などと指令がある時もあれば、相当の数の敵機が帝都に向いつつあるとの情報に続いてズシズシと高射砲の対空砲撃の音も聞こえ、緊迫した空気に先生も生徒もひとかたまりになって飛行機の爆音に耳をすまし、その重苦しい音がどの方向からどの位の速さで近づいてくるのかを、息をこらし神経を一点に集中して頭上を通り過ぎるのをじっと待つのだった。

麻布十番が空襲を受けた日も「死なばもろ共ね」「東洋英和の為ならば」など軽口をたたきながらも、次々に知らされる情報に不安が増してきて「今日こそここにも…」と胸の痛くなる気持に襲われるのだった。爆風で防空頭巾ごと頭が飛んでしまったという話を聞けば、首にスカーフを巻いたり、目・鼻・耳を両手で押さえて低い姿勢で伏せるようにもなった。しかしだれも無闇に恐れたりはしていなかった。

モロトフのパン籠と呼ばれた焼夷弾を丸ごと（一発から48個の弾がバラ撒かれる）受けた我が家の経験から、焼夷弾ならば二階の床を突抜く威力は恐らく無いけれど爆弾は一発で何軒もの家をこわし、大勢の人を殺したり傷を負わせる恐れがあるので、せめて学校は爆弾による爆撃にさらされることのないようにと必死の思い

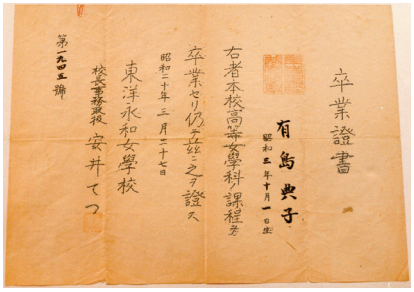
1945年３月　卒業を控えて
上段左端が下山田典子さん

で祈っていた。それでも警報が解除されてドアを開くと、洗濯場のクリーム色の壁に日が差して、まぶしい程に明るく、中庭の緑に心が和むのだった。

昼間の長時間の空襲の帰途、朝は在った家並がすでに焼失しているなどという事もあった。市電はすぐ故障して役に立たず、渋谷・目黒・五反田などからさえ歩いて来る者もあり、バスを押して来たなどという話も聞いた。時間通りに通学することもままならないのに、皆、愛国心、愛校心旺盛で、罹災や疎開で転居した遠い所からセッセと学校工場に通っていたものだ。雪道を渋谷から歩いてきた森元さんが、私のスキー靴姿を見て、羨ましかったと38年を経た今も思い出していわれたが、私は焼け出された時にスキー靴をはいて出たのでほかに履くものがなくてはいていたので、重いうえに紐結びが厄介だったのを思い出すばかりだ。

昭和20年３月　卒業式

卒業式は、私達五年生と、戦時特別措置として四年生も同時に卒業となったが来賓は浜崎(次郎) 牧師だけ。父母の列席もなく、花さえない有様だった。先生方は、ズボンにゲートル、モンペの上・下、生徒もセーラーの制服やへちま衿の学生服ありでスカートは着用出来なくてちぐはぐな服装が多かった。しかし揃わないのは着る物だけではなかった。大切な友人達が十日余り前の大空襲で亡くなり、焼け跡を尋ね歩いても遂にみつからなかった事は皆の心を痛くした。卒業証書も同じ日に印刷工場が焼失してしまい長野先生が急きょ西洋紙に謄写版で刷って下さったものの、遠目には、水野（冨美子）先生が墨で書いて下さった姓名・生年月日・番号だけしか見えない粗末なものだった。


卒業證書
有馬典子
昭和二十年十月一日生
右者本校高等女學科課程ヲ
卒業セリ仍テ証シ之ヲ證ス
昭和二十年三月二十七日
東洋永和女學校
校長事務取扱　安井てつ
第一九四三號

下山田さんの卒業証書

式なかばに警戒警報のサイレンが鳴り、又待避かと皆、顔を見合わせたが、空襲にはならないで無事に式は進行した。

神はわが飼主なれ
我、常に乏しからじ
緑の野にいこいの汀に
神は我をともない給う
御名のゆえに生かし
我を直き道に導き給う
たとえ死の谷をゆくも
恐れあらじ　汝とゆけば……

詩篇のコーラスの歌声を合わせながら、自分に納得させているような気持ちだった。今日別れて、又何時逢えるだろうか！日本はどうなって行くのだろう。恐らく皆の心の中も同じだったろうと思う。

式後、五年生の謝恩会は初等科の講堂で催された。この日の祝菓子は、各自、砂糖をカップ一杯ずつ持ち寄って特別に作って頂く事になっていたのだが、三月十日に空襲で、菓子工場は全焼してしまった。

しかし会場の卓の上には、お赤飯が並べてあった。どなたが工面して下さったのか今も不思議に思う。先生への感謝をこめて中島美意子さんがモーツァルトのハレルヤを橋本多美子さんの伴奏で歌い、最後に四年の時に国語で習った狂言［末広がり］を下敷にした狂言＜Ｂ29＞を私が作って有志で演じた。アメリカ海軍提督ニミッツが大名よろしく「Ｂ29あるか」と呼び出し日本空爆を命じるが日本の上空で神風特攻隊に散々な目にあわされ逃げ帰り、提督への言い訳をいろいろ言ったり、ごまかしに舞をふるまって見せたりするが、提督は負けてきたのを見破り

「ええ憎い奴めの！すさりおろう」

「お許されませ」と逃げるＢ29を

「やるまいぞ　やるまいぞ」と追って入った。作業服に神風の鉢巻をしめた特攻隊にＢ29役の私は追いかけられ、本物を見たこともない仕舞のまねをしたのだから今から考えればまことに冷汗ものであった。

卒業式は済んでも、連日の空襲で混乱していて大学に入学許可された人達も授業が始まらない所が多かった。学校工場はそのまま作業を続け通える人は専攻科として引続き同じように仕事をしたが、罹災・引越し・疎開などで人数はどんどん少なくなっていった。

四月三日の空襲で、麻布一帯が焼土となったが、水野先生もお家が焼失、ご自身も焼夷弾で

画：木下栄子氏

やけどを負われ、命からがら学校へ避難して来られた。戦局はいよいよ悪く授業を受けているのは一年生だけだった。

5月　帝都大空襲とその後

五月二十三日、二十四日、二十五日と連続して空襲があり二十四日は五百機以上の敵機が東京上空に来襲し、いわゆるジュータン爆撃をした。頭上を飛んで行くB25の音に度々防空壕に出入しなければならなかった。二十五日も大空襲があり鳥居坂の坂上にある伯母の家に仮住まいしていた私達一家も連日の空襲に寝不足だったにもかかわらず何かありそうな異常な気配を感じて飛び起きた。暗い空に次々と飛来するB29。そのうちガソリンのにおいがしてきて様子がおかしいといい合っていたら爆撃が始まった。庭を昼間のように照らしだしたエレクトロン焼夷弾をやっと消し止めると、じきに油脂焼夷弾がザザーッとすごい音を立てて落ちて来た。大きな家がバリバリ燃える。隣の浅野さんの高い練瓦塀の向うも物すごい勢いで燃えている。お倉に火が入って屋根が落ちる。炎の色も一色ではない。人々が安否を気づかって呼び交わしたり、叫んだり、本当にこの世の終りかと思う光景を目のあたりにしながら学校は焼けてしまったろうか？どうぞ焼けませんようにと祈る気持ちでいたが、百米も離れていない学校までも行く事が出来なかった。明け方になって兄が見に行って学校から青楓寮まで残ったと聞いた時のうれしさは口には云い表わせない。本当に奇蹟でも起きたのではないかと思った。安否を気づかって練馬から歩き通しでかけつけて下さった山本さん姉妹と無事をよろこび合い、夕方には姉も一緒の四人で、一面焼野原の青山から新宿を通り、電線がたれ下がり、水道が出放しになったりしている町を練馬まで歩いて山本さんの御家に泊めていただいた。途中、焼死体も見たが、前夜一睡も出来なかった上、気が張っていた為か、それ程のショックはなかった。鳥居坂の通りも熱風の通り道になったとの事で、防火用水槽で焼死した人もあった。岩崎さん（今の国際文化会館）の立派な防空壕でも何人かが亡くなったそうだ。

空襲の為、大きい建物が少なくなったせいか軍管区司令部も学校を借りて仕事をし、生徒も特別幹部候補生の名簿整理などをした。長野先生が、兵隊さん達のお風呂を作るためにと、私の家の焼け跡にあった煉瓦を貰いにいらっしゃったのもその頃の事だったと思う。

（1945年卒　旧姓：有島）

〈関連図書紹介〉

「戦いと安らぎ　―1945年前後の青山をめぐって―」

中里　昭子 著

著者の中里昭子氏は本校1947年卒業生であり、勤労動員経験者である。

この本は、氏が戦争のさなかに経験したこと、感じていたこと、そして戦後50年を経て後の世代に語りかけたい思いをつづった40ページのエッセイ集である。その中から主に勤労動員作業の箇所を以下に紹介したい。

1944年、中里氏は３年生として学校工場に、

後半からは沖電気の芝浦工場に通っていた。

「制服の代わりに『国防色』といわれるカーキ色の作業服に身をかため、学徒挺身隊という文字の入った腕章をつけて出勤する毎日でした。配属されたのは五階の組立工場で、無線機器の細かい仕事－ハンダづけやケーブルを配線する下準備－など、地味な仕事の連続でしたが、少しでも役に立てばという純粋な気持ちで皆まじめに働いて日々を過ごしました。しかし、時には材料不足で手が空いてしまうこともあり、そんな時に本でも読みたいと思いましたが、それは禁止され、「あくまで仕事があるかのように作業台に向かっていること」が動員されていた私たちに求められた姿勢でした。朝礼は、「ご神殿に対して拝礼」という工場長の大声で始められ、注意事項などが伝えられるのみでした。」

「責任者として出張しておられたK先生(注)は、私たちのために毎日工場に出勤されました。英語の教師として目の前にいる生徒たちに教えることも許されず過ごされた時間は、さぞ辛く感じられたことでしょう。昼休みになると私たちも多少の自由時間があったので、屋上に出られるときは、常に持って歩いていた讃美歌を手に集まっては皆で二～三曲歌いました。礼拝のときに、そして校舎のどこででも讃美歌を歌った経験は、工場の片隅でも生かされました。自然に集まっては祈り、歌いたくなる気持ちはそれまでの恵まれた環境に感謝する心にもつながるものでした。」

5月24日に山の手大空襲に遭遇、自宅は焼失、翌日担任の先生が行方不明と聞き、焼け跡を長野先生と探すが見つけられなかった。工場も焼失したため、その後は陸軍の仕事に従事することになる。

「場所は駒場の旧第一高等学校校舎の中で、仕事の内容は、第一線で戦死された多くの兵士たちの名簿の確認と、遺品との照合でした。ある時には、芝の増上寺の境内にある防空壕の中で仕事をしました。粗末な棚には、戦地に行った兵士たちの遺品の箱がぎっしりと並べられていたからです。これらの遺品と名簿との照合に半日かかったこともあります。・・・多くのご遺族のために祈りながらの仕事でした。」

若く瑞々しい感性の年頃に、不安や恐怖、悲惨を経験し、「それでもなぜ生きなければならないか」を自問しつつ、明日を生きるために精神を奮い立たせる日々だった。そして物心両面の欠乏に耐える中で、幼い頃から教えられてきたキリスト教の世界観が後の中里氏の拠りどころとなっていったことが綴られている。

画：木下栄子氏
1ｐ、5ｐの絵も、中里氏と同級生である木下栄子氏が『戦いと安らぎ』のために描かれた挿絵

戦後、氏はカトリック教会で受洗し修道女となられ、清泉女学院中学高等学校教諭・校長を務められた。本校の元評議員であり、現在は地域のボランティア活動に参加されている。

最後に、文中数編の詩より一編を紹介する。

――千鳥が淵――

「歩く、歩く、炎天下を
一歩ごとに　苦しみの克服
踏み出した歩みは　もう存在しない
平和への歩みは　前向きに続けられる

嘆きと痛みに胸を打ちながら
ミサの中で　願う
戦争犠牲者の　魂の安らぎを
ヒグラシの鳴く　千鳥が淵の夕べ」

戦争を繰り返してはならないとの著者の強い思いのこもった本書は、戦争を潜り抜けて生きてきた東洋英和の生徒の体験と心情を知る上でも大変貴重なものといえるであろう。

なお、この小冊子は2000年刊行の私家版であり、2006年に編集し直されて『戦いと安らぎと』と題して新風舎から刊行された。年数が経ち一般書店ではどちらも入手は困難であるが、史料室では閲覧に供している。

(史料室　酒井　ふみよ)

[注　K先生：上田 朝 (旧姓 倉長) 先生]

〈資料紹介〉19
「東洋英和女学校　勤労動員関係文書」2

水谷　　悟

戦時下の学校教育として

前回の資料紹介で「勤労動員関係文書」(54点）の概要を目録とともに示した。そこで今回は、その具体的な内容を、時代背景や歴史的過程を確かめつつ、「教員会議記録」・「勤労動員日誌」などを中心に紹介していきたい。

前段階としての「勤労奉仕」

1937年７月の盧溝橋事件を機に日中戦争が勃発すると、**翌年**４月に国家総動員法が公布され、労務動員・物資動員・生産力拡充からなる国家総動員計画が作成された。同年６月に「集団的勤労作業運動実施ニ関スル件」という通牒が出され、旧制中学校と高等女学校の学徒は、夏期休暇中に低学年は３日間、高学年では５日間の援農や清掃、防空施設の建設作業などを行うことが定められた。これに伴い、全国の学校で「勤労奉仕」が盛んに行われていった。

目録番号47「昭和十四年度／昭和十六年度以降十九年十二月まで勤労作業に関する書類綴」によれば、東洋英和でも女学科の四・五年生が同年９月１日から６日まで夏期休暇中に登校して白衣を裁縫するとともに、三年生以下は校舎内外の大掃除を３日間行っている。さらに集団勤労を実施するため、**1939年**７月に東京府北多摩郡小平花小金井にある麦畑2000坪を高等女学科の学校農園として借り受け、年間20日前後の勤労奉仕を実施し、秋には小麦などの収穫物を教員や生徒に有料で配布していた。

「勤労動員」体制の強化と東洋英和

ミッドウェー海戦の敗北以降、米軍の反撃が強まると、**1943年**６月に東条英機内閣は「学徒戦時動員体制確立要綱」を閣議決定し、学徒に対して戦技訓練の強化を図るとともに、「勤労動員」を強化する方針を打ち出した。**1944年**に入ると動員態勢がより一層強化され、とくに学校への持ち出し作業、すなわち学校の軍需工場化が重視された。同年２月の厚生省「国民勤労体制の刷新に関する件」に基づき、女子学校の軍需工場化が推進され、本校の他にも、恵泉女学園、駒沢高等女学校、洗足高等女学校、東京家政学院などで校内での動員が行われた。

こうした時代の波が東洋英和にどのように押し寄せてきたかは、目録番号48の「昭和十九年四月より二十年十月まで勤労動員ニ関スル綴」に詳しい【★１】。ここには1944年４月11日付の「昭和十九年度第一半期学徒勤労動員ニ関スル件」から、翌年10月20日付の教動発第182号「学徒勤労動員報償経理ノ措置ニ関スル件」に至るまで、100点に及ぶ関係史料が収録されている。

【★１】
「昭和十九年四月より二十年十月まで勤労動員ニ関スル綴」

1944年４月に配布された「決戦非常措置要綱ニ基ク中等学校教育内容ニ関スル措置要綱」と題する小冊子には、勤労動員を教育の一環として学徒の錬成をめざすことが謳われ、教職員は「勤労動員ガ実践教育タルノ本義ニ徹シ生徒ト共ニ率先垂範勤労ニ従事」する必要性が説かれている。また、同年４月12日付の「決戦非常措置要綱に基く学徒動員に関する件」では学校種別に動員基準が示され、女子中等学校には第一に「可及的学校設備を工場化し、其の学校の生徒を之に動員すること」が示されている。

つまり、当時、女子の高等教育機関に課されていた社会的役割は、校内に工場を設けて生徒の動員を行い、戦時体制に協力することだったのである。その準備のために学校は請け入れ可能な工場と事前に交渉し、教育局の承認をうけ、必要に応じて予備訓練を実施しなければならなかった。

こうした要請のもと、1944年**６月６日**、「東洋永和高等女学校長　事務取扱安井てつ」の名で「中等学校校舎転用ニ関スル件」という貸与予定先の申請が東京都教育局長宛に提出された。その結果、三・五年生は校内に設置された沖電気芝浦工場東洋永和作業所へ、四年生は安藤電気蒲田工場への出動が決まったのである。

教職員の対応

では、この「動員」に際し、東洋英和の教職員たちはどのように対応したのであろうか。目録番号49の「昭和十九年四月以降　教職員会議録」を見ると、1944年**5月24日**に臨時教職員会議が開かれ、長野彌先生から「通年勤労動員に関する報告」がなされている【★2】。

そこでは、一・二年生は従来どおり授業を行うが三年生以上は勤労動員の対象となること、勤労時間は休憩や勉強の時間を含めて最大10時間までとすること、授業は動員作業との兼合いで週に6時間のみ実施、家政科（育児・保健）や救護実習・保育実習に要点を置くことなどが確認されている。

また、勤労動員中の生徒たちの成績評定基準として「日数と作業の種別」「出欠席日数と欠席事由」「遅刻早退回数」「作業に現れたる成績」などが挙げられている。

その一方、女学校の場合は、動員の際に会社側に対して「集団的に仕事をする」こと、「男工と混じらぬやうにする」ことなどを強調できる旨が確認されている。と同時に、生徒たちに対しては「興奮し過ぎたり工場に必要以上に興味を持ち過ぎる」ことがないように気を付け、機密を守って冷静に行動するように指導する旨が確認されている。国家的要請により勤労動員に出さざるを得ない状況にあって、学校が生徒たちの働く環境をできる限り安全なものに保とうとしている様子がうかがい知れる。その後、**6月30日**に壮行会が講堂で催され、7教室の工場化が決まり、これ以降も会議の席上で動員に関する報告が逐一なされていく。

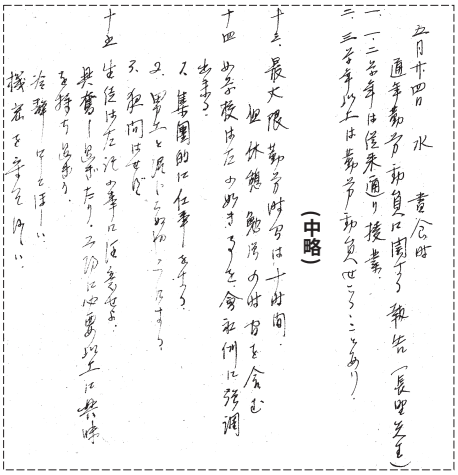
「学徒勤労動員」の実態と戦時下の情勢

では、東洋英和における勤労動員の実態はどのようなものであったのか。今回はとくに目録番号46の「昭和十九年七月一日以降　沖電気株式会社　東洋永和作業所日誌」から当時の様子を見てみよう【★3】。

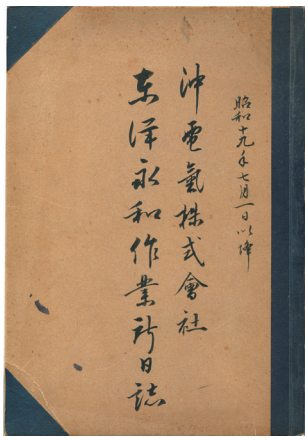
7月1日の日誌によれば、作業初日には三・五年生合わせて240名の「入所式」が大講堂で行われている。その式次第は「一、国民儀礼」「二、芝浦工場長　押田三郎氏　挨拶」「三、生徒代表　五ノ一　植村和子　宣誓」「四、安井学校長挨拶」「五、「海ゆかば」斉唱」「六、幹部　紹介」という順であった。だが当初、作業所の設備が整わず、動員作業は行われていない。作業が開始されたのは、五年生が同12日、三年生が同20日のことであった。作業内容は、五年生が「無線通信器組立（第二製作部組立工場の作業）」、三年生が「チューブ包縛」または「配線」であった。

勤労動員の一日は8:30の朝礼から始まる。人員点呼・国民儀礼・軍人勅諭奉唱・体操・職場前進の後、動員作業が開始される。休憩は一日に3回（10:30より10分／12:00〜13:00／14:30より10分）計80分で、食事はカフェテリアでとっている。午前と午後の休憩時間には体操をすることが奨励され、毎週水曜日が休日と定められた。

夏期休暇中に始まった勤労動員も**9月**を迎え、授業が開始される。9月18日付の日誌によると、


五月十四日　水　書記所
通年勤労動員に関する報告（長野先生）
一、一二年は従来通り授業
二、三年以上は勤労動員せること
（中略）
十五　最大限勤労時間は十時間
但休憩勉強の時間を含む
十四　必要時は左の如きことを会社側に強調
一、集団的に仕事をすること
二、男工と混じらぬこと
十五　生徒は左の事に注意せよ
興奮し過ぎたり必要以上に興味を持ち過ぎ
冷静に行動せよ
機密を守ること

【★2】「昭和十九年四月以降　教職員会議録」
1944年5月24日　より



【★3】
「昭和十九年七月一日以降
沖電気株式会社
東洋永和作業所日誌」

	三年生	五年生
月	裁縫と数学	数学又は国語
火	家政と裁縫	救護
水	休み	休み
木	数学	国語
金	国語	育児
土	（記載なし）	物象

時間割は１日６時限目（各45分）まで設けられているものの、授業は週に６時間のみで、前ページの表の通りであった。

目録番号１の「昭和十九年度教科書配当表」からは生徒たちに配られた教科書も確認できる。

しかし戦局の悪化に伴い、９月26日には「作業の都合上、当分授業休止」となる。また同30日には、三・五年生に対して三月末まで動員が継続される旨の通知が届いている。その後作業は増加傾向となり、「残業六時半まで」という記載が散見されるようになる。こうした作業に従事するかたわら、有志の生徒たちは戦死者遺族激励慰安会や勤労学徒慰安音楽会などに出かけている。

1944年７月のサイパン島陥落により「絶対防衛圏」が崩壊すると、本土空襲が激化していく。とくにＢ29爆撃機が東京初空襲を行った1944年**11月**に入ると、日誌の内容も緊迫度を増す。同月29日の日誌には、「二十九日夜から三十日早暁にかけ帝都空襲の際、学校も焼夷弾数多投下されるも被害なし、倉長先生は全焼される、生徒の家屋は被害殆んどなし」とある。そして、**12月**に入ると、危険を回避して「午前中にて作業中止、帰宅」あるいは「休業」する機会が増えていく。そのため、三年生の一・二組を沖電気の芝浦工場に移し、それに代わって二年生が学校工場の作業に動員されていった。

こうして警戒・空襲警報の発令・解除が繰り返されるなか、同年**12月26日**の日誌に「十二時半より講堂に集まり讃美礼拝を行ふ」との記載が残されている【★４】。連日の空襲で帝都東京が燃えさかる危険のただなかにあって、一日遅れとはいえ、クリスマスを覚えて礼拝が行われていた事実に刮目すべきであろう。

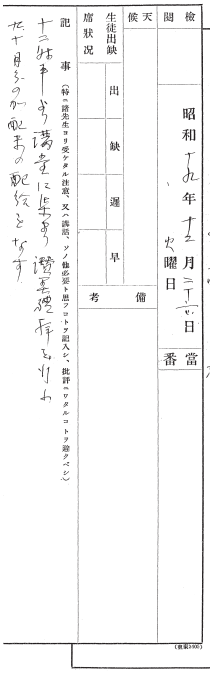
年が明け**1945年１月**３日より勤労動員が再開され、７日には芝浦製作所の勤労課職員が来校して「決勝超増産皆勤運動」について説明している。それは、皆勤者に対して特別報償となる個人賞や家族賞を設けるとの発表であった。

３月10日には「午前十時頃警戒警報発令　十一時半解除／昨夜のＢ29の空襲の為生徒の出席少なし／交通情勢にかんがみ二時にて下校」とある【★５】。ここに記されている「空襲」とは、いわゆる東京大空襲を指している。通常、生徒の出勤状況は出・欠の順で記録され、出席は170名前後・欠席は30名前後であった。しかし、この日は大空襲の被害の影響により欠席者が倍増したためか、わざわざ欠席73名・出席134名の順で記されている。

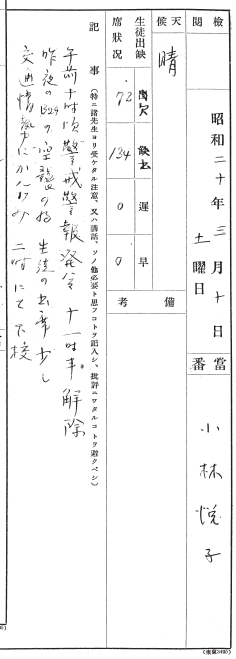
目録番号50の「昭和二十年三月六日以降教員会議記録」から、1945年**３月24日**の昼食時に教員会議が開かれ、卒業式に関することが話し合われたことがわかる。なかでも、卒業証書については、「三月十日の空襲で焼失／其後再印刷を頼んでおいたが結局間に合はぬ」との記述がみられる【★６】。

結局のところ、沖電気株式会社東洋永和作業所における勤労動員は、1945年**５月25日**の帝都大空襲で沖電気芝浦工場の大部分が焼失してしまったことで、学校工場も６月限りで閉鎖することとなった。(75号２p参照）すでに同年４月15日に安藤電気、５月23日に中央光学精機が全焼していたため、その後の勤労動員は陸軍聯隊区司令部の作業補助へと移行していくのである。

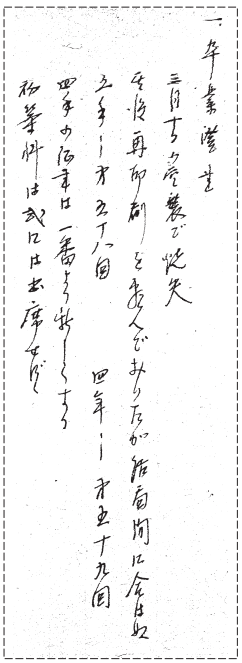
（中高部社会科教諭・史料室委員）



【★４】
1944年12月26日の日誌



【★５】
1945年３月10日の日誌



【★６】
1945年３月24日の
教員会議録より

〈思い出の先生がた〉21

小さい紙きれ　荒牧富士子先生の思い出

丹羽　輝子

長野彌先生が東洋英和女学院の院長兼幼稚園長でいらした頃、幼稚園の現場の責任は主任の荒牧富士子先生にまかされていました。こどもの成長に欠かせないことの一つに環境を整える活動や、人の為に働く喜びを感じる自主的活動等、人として成長していく過程で必要な自主的な活動を毎日の保育の中に取り入れる工夫は、こどもと生活を共にする保育者達も夢中にさせられました。

園児達が降園後に開かれる教師会の時、隣席の荒牧先生から「『――を探り―』 の聖句の箇所はどこでしたっけ？」と書かれた小さな紙切れが舞い込んできました。確か詩篇の139篇だったとの答に、丸い肩をすくめながら早速その箇所に目を通しておいででした。実は、先生は保育者のクラス報告に耳を傾けながら、毎月保護者に配布する「かえで」の巻頭言の内容と取り組んでおられました。「かえで」にはまず、今保護者達に必要と思われる聖句が書かれ、次に先生の巻頭言と続きます。数ある中の一つで多くの人の心を動かした聖句と巻頭言をここに御紹介し、先生の地についた信仰と幼児教育へのひたむきな姿勢をお伝えしたいと思います。

【1981年「かえで」10月号より
―聖書のことば―

主よ、あなたはわたしを探り、わたしを知りつくされました。あなたはわがすわるをも、立つをも知り、遠くからわが思いをわきまえられます。あなたはわが歩むをも、伏すをも探り出し、わがもろもろの道をことごとく知っておられます。(詩篇139篇)

わたしたちが一個人であるこども一人一人を知るということは並大抵のことではないと思います。今日はこうだろうと思っていることでも明日になれば、その一人格は全く違った面を見せ、それではこうかと思えば、また、次の点で違った反応を示します。とかく、教師や親は自分たちは一人のこどもをよく解っていると思いがちですが、私たちは、こどもたちの人格の何分の一も知らないのではないでしょうか。詩篇の詩人は神がわたしたちを知りつくしておられるといっています。私たちは神に知りつくされ、その一挙手一投足もそのみむねの下にあることは、今の時代でも同じであると思います。わたしたちの知るということがあまりに浅はかな知り方の故にいろいろな養育上の問題もおきてくるように思います。知りつくされている神の前に謙そんに頭(こうべ)をたれて、わたくしたちの知る思いをますます深くたしかなものに変えてゆきたいものです。】

荒牧富士子先生

先生は、現園舎が建てられた当初から、園庭の自然を大切に守ってこられ、追分キャンプ、アジアの保育者との交流、夏休みノート、お父様との遠足、ぎんなん献金など、様々な試みを保育者と共に話し合いながら始められました。これらは東洋英和幼稚園の特色を示すものとなり、今もなお検討を重ねながら受け継がれてきています。

(元東洋英和幼稚園園長)

荒牧 富士子先生略歴
(あらまきふじこ)

1919年４月21日生まれ
1937年　普連土学園卒業
1939年　東洋英和幼稚園師範科卒業
　　愛清館保育部に就任（～1944年）
1944年　長野市私立旭幼稚園に就任（～1952年）
1960年　東洋英和幼稚園に就任（1961年より主任）
1965年より東洋英和女学院短期大学講師を兼任
1973年　東洋英和幼稚園園長となる（～1985年）
1975年　キリスト教保育連盟理事長となる
　　（～1981年）
2004年11月20日　逝去　（享年85歳）

主な受贈資料

＊ミス・カートメル遺品（書簡等）多数

カナダから再びミス・カートメルの遺された品々が寄贈されました。大半が書簡や書類で、ミス・ハミルトンの軽井沢からの手紙や、ご自身が書かれた日本での出来事の回想と思われるメモもあります。宣教師の方々の消息も含め、貴重な資料が含まれていることは確実です。いずれ解読をして誌面にてご紹介していきたいと思っています。

＊ミス・ロジャース遺品：写真、書簡
＊記念品：文鎮（校舎、楓）、バッジ、ネクタイピン、ペーパーナイフ（50週年記念）、校章、卒業記念指環、風呂敷（1974）
＊物品：着物（校歌の描かれたもの）、制服（冬・夏・合服）、コート（ハーフ、オーバー）他
＊小学部で使用した用品類（親子２代）：ランドセル２、副かばん２、制帽、校内服、さんすうセット２、教科書67冊、こかげNo.４、こどもさんびか（英和版）、新約聖書、しおり２
＊修業証書（1889年予科）
＊創立81，82周年記念祭プログラム、1964年中学部入学許可書、高等部生徒手帳他
＊ＣＤ－Ｒ　小学部母の会「ぎんなんだより」2010年前期号関連取材写真
＊古写真　５枚
＊“Japanese People and Things･･･”, “Window on Japan” The United Church of Canada
＊“Suggestions for CGIT-Study on Japanese”
＊『神のみくらに玉と輝け　愛と祈りの教育者　中川咲子の物語』　石渡秋著　聖学院広報センター（注：中川咲子氏は元青楓寮舎監）
＊「蘆花の中の徳冨愛子」半藤英明著　熊本県立大学
＊『ヘンデル・メサイア　心に響く言葉と音楽・癒しのメッセージ』陶山義雄（元本学教授）著　ヨベル社
＊『パレスチナに生まれて』ナージー・アル・アリー著　露木美奈子（中高部教諭）訳　イソップ社
＊『戦いと安らぎ－1945年前後の青山をめぐって』『戦いと安らぎと』中里昭子（1947年卒）著（本号５・６pにて内容紹介）
＊『聖書の人びと』婦人之友社（復刻版）（石井次郎元院長著「クレネ人シモンの生涯」所収）
＊『河井道の生涯』関根文之助著　恵泉女学園（復刻版）
＊『ミス・ダイヤモンドとセーラー服　エリザベス・リーその生涯』古川照美等編　中央公論新社
＊『横浜英和学院百三十年史』
＊『北陸学院125年史』『北陸学院125年の歩み』
＊「この十年の歩み　創立90周年記念　日本聾話学校」
＊『共愛学園百年史』下巻１・２
＊「日本私立短期大学協会50年史」
＊『キリスト教学校教育同盟　百年史　年表』
＊『女子美術教育と日本の近代　女子美110年の人物史』
＊「関東大震災女学生の記録」フェリス女学院その他　他大学年史紀要　等　多数

主な移管資料

＊『聖学院中学校高等学校百年史』
＊「東京ＹＭＣＡ130年の歩み」　院長室より
＊８ミリテープ「1982年度　ザ・予告！」
中高部生徒会室より

購入資料

＊『アーカイブ事典』大西愛等編著　紀伊國屋書店
＊『メレル・ヴォーリズと一柳満喜子　愛が架ける橋』グレイス・フレッチャー著　平松隆円監訳　水曜社
＊『キリスト教学校と建学の精神』深谷松男著　日本キリスト教団出版局

〈訂正とお詫び〉
No.75の３p－写真キャプション　撮影時（1945年３月10日）には１年でなく２年でした。
同　４p－勤労動員年表　1942年10月小林商店（本所厩橋）はライオン歯磨工場でした。（なお、パラシュート製造工場の場所と動員された日は不明です。）
お詫びして訂正します。

〈お知らせ〉
史料室では、学院の歴史や学校生活をものがたる資料を収集しています。ご家庭にあってご不要のものがあれば、ご寄贈いただけると幸いです。
お問い合わせ先は下記の通りです。
東洋英和女学院史料室（法人事務局内）
TEL03-3583-3166(直)　FAX03-3583-3329(直)
E-mail:archive@toyoeiwa.ac.jp